

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受承認第第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)  
平成二十一年四月一日発行(第四百十二巻第四号)

# ホトトギス

四月号



## 俳句随想 〔三百二十一〕

汀子

天地有情の投句用紙の裏に通信欄があり、色々ご意見やご感想お便りなどが書かれてある。読ませて頂いているが、虫眼鏡を使わないと見えない細かい字で書かれてあるのは大変である。でも色々な参考になるご意見は必ず読ませて頂いている。季題についてのご質問が多い。皆さんに知って置いて頂かなければならない疑問にはお応えするが、時には日本伝統俳句協会の「花鳥諷詠」の今井千鶴子氏が「質疑応答」で答えておられるときはそちらを読んで頂けるであろうと思つてそのままにしておく。季重りのご質問も多い。季重りはいけないと言われる指導者もあるが、それは一句の中に二つ以上の主になる季題がぶつかり合つて十七文字のなかで散漫になる場合は避けなければならぬであろう。季題でももう一つの季題を助けるような働きがある場合はいいのである。俳句は短い詩であることを枷として、言葉を選び、省略をして、有効に季題を使って欲しいのである。近頃の俳句は季題に語らせるといふことを余り考えていないように思ひ体ないと思う。

しかし、季題に頼るだけでもいけない。俳句には描写も大切である。

旬日記 汀子

平成二十年四月四日 悼 成瀬正俊様

犬山の城主を悼む花万朶  
国宝の城に孤高のさくらかな  
城淋したとへ花咲き満つるとも

四月五日 芦屋ホトギス会

百千鳥み吉野の旅近づきぬ  
花の訃といふも犬山城主かな

四月六日 関西野分会

三月菜とておしたしは旬のもの  
みよし野に心つなぎて桜見る  
明けてゆく刻々春の月細し

四月六日 下萌会

春曉の細き月見て旅立ちぬ  
咲き満つる花の心を問ふ日かな  
風止みて花の沈黙はじまりし

四月七日 ロイヤル俳壇

すぐ変る弥生の空に心して  
日永とて油断の旅でありしかな  
初々とてたふまちといふ日数

四月八日 虚子忌

甦る春の嵐よ半世紀  
春雷の一喝と聞く忌日かな  
花散らす風荒るるとも集ひ来し

四月十日 清交社

先づ皆の目を惹く赤きチューリップ  
赤は目を惹くチューリップ五十本  
チューリップ開く刻々ありにけり

四月十一日 工業倶楽部

花の頃荒るる天候諾ひぬ  
読み返す手紙のありて春灯

行春の日和ととのひつつありぬ  
地図追うて花追うて旅ととのへり

四月十三日 吉野山くつろぎの旅

落椿象の小川にほとりして  
すめらぎの隠れたまひし山桜  
夕槿の幹の白さ移りけり

四月十四日 綿業倶楽部

み吉野の花ならざるはなき仲間  
一本の桜全山花の雲

第二回会

一枚の闇をおぼろにする桜  
六日月朧の闇を抜けてをり  
さすらへる如く朧の山路行けり

四月十三日 吉野山くつろぎ 第三回会

山暮れて花の所在の残りけり  
朧夜の時間過ぎゆくこと忘れ  
二日目も花の日和となる吉野

庭桜峰よりつづきをにけり

山桜朝日を抱きはじめけり

第四回会

皆黙し花の別れを惜みけり  
東西に別れて花の帰路となる  
名残惜し鶯の鳴き方にさへ

四月十五日 大阪倶楽部

ふり返る旅うららかなつかし  
遠ざかり案外辛夷多き帰路  
み吉野の旅路辛夷の孤高かな

四月十五日 綿業倶楽部

麗かな旅も終つてしまひけり  
日永とて楽しきことは過ぎ易く  
快晴の加勢のありし旅遅白

四月十六日 夏潮会

いくたびも庭に出てみる遅日かな  
咲きたびも庭にでてみる遅日かな  
黄の主張紅に譲りてゆく桜

根付きたる青虎椿よみそなはせ

狭庭にもあるはかりごと亀の鳴く  
四月十日 野分会

み吉野の西行庵の余花追うて  
四月十二日 有恒倶楽部

朧夜の庭に心を放ちけり  
風絶えてたちまち瘦せし柳かな  
まづ一羽来て百千鳥なせしこと

四月二十一日 無名会

惜春の旅はかりごと密にして  
月朧うすく色置きし雲  
終りなきことも桜の旅路かな

四月二十四日 きさらぎ会

百千鳥一羽離れて百千鳥  
山谷に山気下り来て桜かな  
山路行く遠き一点より桜

四月二十五日 時雨會

はるか行く山路桜の又現る  
散る桜吹雪く桜を見るまでは  
うす衣をまとひはじめし月朧

四月二十五日 今宵は満ちて朧月

空の旅弥生の富士は雲がくれ  
快晴の今宵は満ちて朧月  
靡くものあれば応へて春の風

四月十六日 句会と講演の会

星分けて遅速のありぬチューリップ  
色分けたるより月の朧かな  
観潮の渦に吞まるる如俯瞰

NHK「俳句王国」出句

観潮の波の高きをうら返す  
東京の大地のめぐみ春の草  
なほ奥へつなぐ余花あり吉野山

初夏といふ光に紛れ込みし旅風

山裾に伸びてゆく街若葉風

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年四月二日 一水会

春の雲象虎麒麟馬羊  
辛夷咲く頂上空を近付けて

四月三日 蕉心会

タイガース亀鳴いたかて負けへんで  
水の色より永き日の明け初むる  
空を恋ふ七八片の落花かな  
花下に佇つ過去持つ君でありにけり  
一本の桜に水尾の乱れかな  
蝌蚪掬ふあなたの白き掌  
下町の母なる大地落花舞ふ  
序の舞の落花芭蕉か実朝か  
この池の蝌蚪メタボリツク症候群

四月四日 悼 成瀬正俊様

天上に集ふ山会暮遅し

四月七日 はせを句会

花冷の手を花冷の君の手に  
武士の又一人逝く花の雨  
咲き満ちて全山の花影持たず  
雨降れば四月八日はもうそこに

四月八日 虚子忌

この雨も虚子忌日和といふべかり

四月十日 土筆会

別れ霜こども更地の都心かな  
別れ霜とは寿福寺の一步より  
蠅生る研究室でありにけり  
ここはどここ私は誰と蠅生る

四月十二、十三日 吉野くつるぎの旅

天泣のごと一片の落花かな  
亀鳴くや一人閑所に捕へられ  
散りたくて咲き満ちてゐる桜かな  
花の黙人の騒ぎでありにけり  
人沈めやめ鳥語鎮めて花万朶  
夜桜ややはり何かが居るやうな  
花を祝ぎ金本二千本を祝ぎ  
若女将女将昇格花の宿  
囀にこらへ切れざる二三片  
朝光と花と佳人と優男  
方言を忘れ春告鳥気取る  
来年の花の予約といふ風雅

四月十四日 朝日カルチャー若草句会

桜貝太古の歴史語らざる  
満開の桜満目人の列  
桜貝明日の蝶になりたくて

四月十五日 草木瓜会

満開の下一皿の桜餅  
君のこと勿忘草の咲けばふと  
駅降りて香の一斉に梨の花  
梨の花香れば稲城てふ一会  
山の色吸うて吉野の桜餅

ぷつと葉の沈んでゆきし桜餅  
四月十七日 登高会

甘茶かけ大いなる忌とうべなへり  
蝌蚪の紐花鳥諷詠てふ自由  
消えて尚追ひかける子や石鹼玉  
子の夢は直径五糎石鹼玉

四月十九日 信濃虚子忌

再びの句碑との出会ひ花下に佇ち  
花繋ぐ旅とは虚子を偲ぶ旅  
鎌倉に信濃に縁虚子祀る  
春の風邪新幹線に置いて来し  
暖かく信濃に虚子を偲ぶ日よ

四月二十日 若水句会

鎌倉に蝦夷に信濃に虚子祀る  
浅蜷とは丑三つ時に語り出す  
暮の春花壇と化せる丸の内  
房総の風を纏ひて浅蜷掘る  
暮の春とはパステルの風の色  
虚子忌とはここまで人を熱くする

四月二十三日 目黒学園句会

春惜む五十センチの歩幅かな  
大朝寝地球の自転止めてをり  
春惜む旅北へ行く西へ行く  
浅蜷掘る江戸前といふ技のあり  
春惜む人せかかせかと丸の内  
四月二十六日 ホトギス社句会  
水尾歪むより観潮の揺れとなる  
観潮船往路の笑顔帰路の黙

# 雑詠

## 廣太郎 選

冬帝に起こされ病める吾をりし 熱海 嶋田一步  
 病む窓に新しき灯や酉の市 同  
 人の子といふものを見る七五三 同  
 遙か来て訪ふ水竹居偲ぶ秋 京都 安原 葉  
 爽やかに離陸たちまち旋回す 同  
 旅の夜の花火見といふもてなしも 同  
 しぐるるや戒壇院に北の門 八尾 岩垣子鹿  
 怪しげなものまで煎じ風邪薬 同  
 灯ればみんな聖樹に見えてきし 同  
 枯木径心の刺のまだ抜けず 香川 湯川 雅  
 潜らんとする鳩に鳩浮かびきし 同  
 ゐのこづち空にくつつきたく揺るる 同  
 鳶の弧と鷹の直線擦れ違ふ 渋川 木暮陶句郎  
 目貼する株 佃大暴落の夜 同  
 冬帝の振り上げてゐる月の斧 同  
 夜の銀杏黄葉は自づから光る 神戸 立村霜衣  
 風邪の子の泣くときは母呼びにけり 同  
 マスクして臆重さうなりしかな 同

温泉街に畳屋多し花八手 熱海 嶋田摩耶子  
 紅葉燃ゆ登山電車の谿に駅 同  
 買ふ列の又伸び年末宝籤 同  
 簡単に予定を立て、年用意 福岡 松尾緑富  
 年の暮理髪の日時予約して 同  
 年の暮予定通りに片付かず 同  
 黄落の風に怒濤となれるとき 八尾 山下美典  
 河豚提灯仰ぐのみにて通り過ぐ 同  
 駱駝色とはぬくさうに枯芝も 同  
 音高く落葉を踏みて廃村を たつの 浅井青陽子  
 廃村の軒の大根すだれかな 同  
 廃村の小湖いちじゅんバスの秋 同  
 墓碑銘の字の虚子に似て露けしや 樞原 稲岡 長  
 時雨るるや丹波さび色情あり 同  
 主観とは我執に非ず一茶の忌 同  
 鷹ひとつ隠して空の青さかな 龍ヶ崎 今橋真理子  
 生きてゐる証に飛んで冬の蝶 同  
 街は冬あの日あの時あのだ顔 同  
 角の海の潮巻き上げて神渡 福山 竹下陶子  
 波岩を呑み冬の盛り上る 同  
 裏木戸の犬顔見知り鳳仙花 同  
 濡れ色といふ初冬の街に着く 神戸 山田弘子  
 詩を作れ落葉浴びよと庭はあり 同  
 いくばくの解かぬ転居荷冬に入る 同

# 雑詠句評(三月号より)

生れ、夏には躍動し、そして秋になるとその生涯の終焉に近付いてくる。秋蝶の姿が、まるで一偉人が人生を回顧しているように重厚に表現されている。(廣太郎)

紅葉は今年遅おすやろと京 八尾 岩垣子鹿

とほ歩・むつみ・千鶴子  
芳子・憲明・葉

眞理子・保佳・中正  
静龍・美奇・廣太郎

過ぎし日を探しみるらし秋の蝶 泉太津 三輪満子

蝶は四季を通じて、ひらひら舞っている。

さて掲句は秋の蝶である。その秋の蝶が、秋かもしれない。秋の小草かもしれない……に、戯れる様に、秋の淡い日差しに輝いて舞っている。

その様は、過ぎ去った、楽しかった日々を探し求めているかの如く見えたのである。

これから、冬を迎えようとする秋の蝶なればこそその感懐も一人である。

その様な情景をさらっと、諷詠されており、好感のもてる句。(とほ歩)

四季それぞれに季節としてある「蝶」であるが、その季節毎の特徴で詠まれた名句が古今生れた。この句の「秋の蝶」は、春に

十一月一日二日と京都で関西ホトトギス大会が開催された。その時のお句であろう。今年は暑さも残暑もひとときわ厳しかっただけに、紅葉が心配であったが、台風の上陸回数が少なかったせいで塩害がなく、結果的には一段と紅葉がきれいな年であった。

十一月の初めはまだ薄紅葉の京。京都となれば期待も大きい。京都の方にとっては一番いい頃の紅葉を見てもらいたいと思う気持が「今年遅おすやろ」と優しく口について出たのである。京都弁のやさしさについて「いえいえきれいですよ」答える声が聞こえる。しかももみじではなくこうようとKで始まり、今年のK、京のKと言葉の響きも快い。見えない卓越した技巧の作者ならKでの一句である。(むつみ)

平成二十年十一月に行なわれた関西ホトトギス俳句大会は、京都が吟行地であった。例年この時期はこの世のものとも思えない素晴らしい「紅葉」が堪能出来るが、近年の温暖化も原因なのかこのところ色付くのが遅いようだ。ほんなりとした京言葉が季節の美しさを表現している。(廣太郎)

(以下略)

# 天地有情

# 江子選

爽やかに生涯虚子の友として 東京 稲畑廣太郎  
丸ビルの縁を肥後に繋ぐ秋 同  
凧の暗闇坂を吹きおろす 同 今井千鶴子  
淋しくて十一月は嫌ひてふ 同  
留村の奉仕も語り西虚子忌 たつの 浅井青陽子  
留村のつづぎの村の芒原 同  
被災の日近づいて来るそぞろ寒 京都 安原 葉  
被災の日偲ぶ露寒来りけり 同  
大根を炊くゆつくりとした家居 神戸 長山あや  
糶田は稔りの余韻奏でをり 同  
百歳を以て人生の去年今年 豊中 瀧 青佳  
何故かくも世は乱るゝや芭蕉の忌 同  
老犬の坤吟つづく寒夜かな 樞原 稲岡 長  
御堂筋その南端の師走かな 同  
月祀る汝が設計の文机に 神戸 山田弘子  
高々と活けし芒に山の声 同  
一灯を点しつづけて秋惜む 吹田 宮崎 正  
冬ざるも芒は姿正しをり 同

はまごうの紅葉の頃をいまだ見ず 福岡 松尾緑富  
はまごうの落葉の音と聞きとめて 同  
浄瑠璃のいよよ露けき愁嘆場 熊本 岩岡中正  
連山といふ露けさの走りけり 同  
眼帯のとれてまぶしき小春かな 箕面 井上浩一郎  
退院の薬手にあり神農祭 同  
啻ならぬ白雨先立て来し訃報 金沢 藤浦昭代  
葬りにつなぐ一宿夜の秋 同  
コピーして敷かせるつもり宝船 神戸 後藤比奈夫  
海嬴回す力学句を作る力学 同  
早起きを怯む心の冬めけり 東京 河野美奇  
凧の海白く噛み黒く噛み 同  
ひそやかに初雪忌とぞ名づけみる 龍ヶ崎 今橋眞理子  
雪国の手のあたたかき人なりし 同  
病窓に初雪の舞ふ日なりけり 石川 辻口八重子  
無人駅小さなクリスマスツリー 同  
冬木立大きな空となりにけり 熱海 嶋田一步  
銀杏落葉終へて枝ぶり残りけり 同

# 天地有情句評

## 汀子

被災の日近づいて来るそぞろ寒  
京都 安原 葉  
地震の記憶。

大根を炊くゆつくりとした家居  
神戸 長山あや  
風呂吹大根への主婦の心。

爽やかに生涯虚子の友として  
東京 稲畑廣太郎

虚子の生涯の友、赤星水竹居。

風の暗闇坂を吹きおろす  
東京 今井千鶴子

不安を感じながら坂を登る心の推移。

留村の奉仕も語り西虚子忌  
たつの 浅井青陽子

西虚子忌の竹内留村を偲び。

長寿とて一年の折目。

老犬の坤吟つづく寒夜かな  
榎原 稲岡 長

老いた犬の寒夜。

月祀る汝が設計の文机に  
神戸 山田弘子

改築成った喜びの中で。(以下略)